アンドレイ・カリーニン演出『同志キスリャコフ』　写真提供：アレクサンドリンスキー劇場

［ロシア］

沈黙の中の演劇

篠崎 直也

2016年、最も「政治的」な劇場と言われるテアトルdoc（Theatre.doc, Moscow）で『戦争はすぐ近く（War is near）』という作品が上演された。これはルガンスク（ウクライナ語読みはルハンシク）の市民から同劇場に届いた手紙を元にしたウクライナ東部紛争の実態、ロシアも介入したシリア内戦、クリミアでのテロに関与したとして実刑判決を受けたウクライナ人映画監督オレグ・センツォフ（Oleg Sentsov）の裁判を題材にした3部構成からなるドキュメンタリー演劇である。ロシアの極右組織SERB（South East Radical Block）のメンバーによって舞台に汚物が入ったコップが投げ入れられたため、上演が一時中断する事件が発生し、演劇の枠を超えて当時注目を集めた。また、同年にはバルチースキー・ドーム（バルトの家）劇場（Baltic House Festival Theatre, St.Petersburg）に付属するアナトリー・プラウジン工房（Experimental Stage of Anatoly Praudin）とツェフ劇場（TSEKH Theatre）が

共同で戦争3部作の1作目となるドキュメンタリー劇『ドネツク（ウクライナ語読みはドネツィク）、第二の舞台（Donetsk. Second stage）』を上演。いずれも直接的な権力批判ではなく、より普遍的に反戦のメッセージを込めたものだったが、今となってはロシアでは「戦争」という言葉の使用が禁じられるほど、身近で緊迫した状況になってしまった（現在は両作共に劇場のレパートリーから外れている）。

筆者は『国際演劇年鑑2015』におけるロシア演劇の報告の中で、2014年のクリミア併合による演劇界への影響について触れたが、上記のような上演作品も示す通り、特にウクライナ東部の人々にとって紛争はすでに8年前から続いていた。ただし、多くのロシア国民にとってそれはどこか遠い地域の話であり、兄弟民族（もはやウクライナではこの表現を拒否する人も多いだろう）が銃を向け合うことになるとは想像だにしなかった。2022年2月24日、ロシア軍が国境を超えてウクライナに侵攻したことにより、ウクライナとロシア、そして世界の情勢は一変する。

その影響は演劇界においても演劇人たちの逮捕、起訴や国外流出、劇場における辞任や解任、上演の中止や禁止、国際交流の停止、劇場・劇団への検閲や脅迫、動員令による演劇人の軍への招集などといった形で表れた。演劇雑誌『テアトル（Teatr）』のWEB版はウクライナ侵攻以降、毎日演劇界に関連するニュースをタイムラインで公開しているが、それでも全てを報じきれないほどあまりにも多くの出来事が起きている。本稿ではその中から特に反響が大きかった事件を取り上げる。

ウクライナ侵攻直後は多くの国民と同様に演劇人たちも自身のSNSなどで「戦争反対」のメッセージを発信。さらに、レフ・ドージン（Lev Dodin）、ヴァレリー・フォーキン（Valery Fokin）、コンスタンチン・ライキン（Konstantin Raikin）、アンドレイ・モグーチー（Andrey Moguchy）など国立劇場の重鎮である演出家や俳優が署名に加わり、プーチン大統領宛てに反戦を訴えるオープンレターが公開された。しかし、3月4日に「偽情報」を発信した者に刑罰を科す新法（フェイク法）が可決されると、反戦活動は沈黙へと変わる。

こうした中で、表現の不自由だけでなく身の危険を案じて著名な演劇人たちがロシアを去った。ポーランド国籍を取得した劇作家のイヴァン・ヴィリパエフ（Ivan Vyrypaev）は自身の戯曲上演による収入をウクライナ支援基金に寄付することを表明。ロシア中の劇場のレパートリーから彼の戯曲上演が姿を消した。

リトアニア人演出家のリマス・トゥミナス（Rimas Tuminas）（ワフタンゴフ劇場［Vakhtangov Theatre, Moscow］）やミンダウガス・カルバウスキス（Mindaugas Karbauskis）（マヤコフスキー劇場［Mayakovsky Theatre, Moscow］）は故郷へ戻り、過

去に裁判沙汰に巻き込まれた演出家のキリル・セレブレンニコフ（Kirill Serebrennikov）やティモフェイ・クリャービン（Timofey Kulyabin）も欧州に拠点を移した。

国内外の多くの映画にも出演しているチュルパン・ハマートヴァ（Chulpan Khamatova）は出国先のラトビア・新リガ劇場（New Riga Theatre, Latvia）での一人芝居『Post Scriptum』（アルヴィス・ヘルマニス［Alvis Hermanis］演出）において、2006年に暗殺されたジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤ（Anna Politkovskaya）が記した2002年のモスクワ劇場占拠事件に関するテキストを朗読。過去の事件ではあるが、現政権に疑問を呈するメッセージであることは明らかだ。

さらに、アメリカ滞在中だった演出家のドミトリー・クルィモフ（Dmitry Krymov）はロシアに戻らないことを決め、ニューヨークのラ・ママ実験劇場に自身のラボを開設した。このようにウクライナ問題が起因となった演劇人の流出ではあるが、ロシアの才能が世界に知られる契機と捉えることもでき、今後は旧ソ連諸国や欧米各地のロシア劇場が国を去った演劇人たちの拠り所となる可能性もある。「ロシア演劇」の概念の拡張が進むのかもしれない。

その一方で、国内では消滅に追い込まれた劇場もある。メイエルホリド・センター（Meyerhold Centre, Moscow）は侵攻を批判した支配人のエレーナ・コヴァルスカヤ（Elena Kovalskaya）が辞任、演出家のドミトリー・ヴォルコストレロフ（Dmitry Volkostrelov）も解任となり、劇場はドラマ芸術学院（School of Dramatic Art, Moscow）と統合。セレブレンニコフが創設したゴーゴリ・センター（Gogol Centre, Moscow）も詩人ユーリー・レヴィタンスキー（Yuri Levitansky）の生誕100年を記念した朗読劇『私は戦争に参加しない（I Don't Take Part In War）』の上演後に劇場の活動終了を宣言し、現在劇場の建物はゴーゴリ・ドラマ劇場（Gogol Drama Theatre, Moscow）と名称を変えて全く別の組織に変わっている。

「黄金のマスク」演劇フェスティバル（Golden Mask Theatre Festival, Moscow）ではペテルブルグのボリス・パブロヴィチ（Boris Pavlovich）演出『ユディト（Judith）』（アルマ・マーター基金［Alma Mater Foundation, St.Petersburg］）が上演プログラムから外れた。劇作家・演出家のクリム（KLIM）によるテキストを基に、ウクライナ人女優カテリーナ・タラン（Katerina Teran）を起用しロシア語字幕を付けながらウクライナ語で上演、途中でウクライナの民族衣装に着替えながらユディトの物語が進む。争いは永遠に続き、人々はあらゆるものを失ってゆく。初演は侵攻前であるが、現在のロシアの状況で上演を続けることは困難だ。ベラルーシの作家パヴェル・プリャジコ（Pavel Pryazhko）による普通の人々のありきたりな日常についてのテキストを写真の投影と共に語る『悲しむ神々の委員会（The

Committee of a Sad Deity)』（テアトルPost［Theatre Post, St.Petersburg］）も同様に「運営上の理由」により除外されたが、演出のヴォルコストレロフの政治的立場が原因であることは想像に難くない。

また、最優秀演出家賞を受賞したドミトリー・クルィモフはアメリカ滞在のため授賞式を欠席し、代わりに主演のエフゲニー・ツィガノフ（Yevgeny Tsyganov）が「彼はこのマスク（仮面があしらわれた盾）をドミトリー・ムラトフ（昨年ノーベル平和賞を受賞した独立新聞「ノーヴァヤ・ガゼータ」の編集長）に渡して欲しいと頼んだ。誰かがまた何かの液体を彼の顔にかけようとしたら、マスクが守ってくれる」とメッセージを伝えた。政権の闇を取材し続け、電車内で何者かに赤い塗料をかけられていたムラトフへの連帯を示している。

「黄金のマスク」演劇フェスティバルの上演プログラムから外されたボリス・パブロヴィチ演出『ユディト』　写真提供：アルマ・マーター基金

ベラルーシの作家パヴェル・プリャジコのテキストによる『悲しむ神々の委員会』「黙って進む」の文字が見える　写真提供：Theatre Post

このように反戦、反プーチン政権の動きが広まる一方で、ロシア軍のシンボルとなっているZマークを劇場の外壁に掲げたタバコフ劇場（Tabakov Theatre, Moscow）のような例もある。ロシアの多くの劇場は国からの助成金によって運営されているため、迎合せざるを得ないという事情もあるだろう。しかし、国内外の様々な情報に接した上で現政権を支持する国民も多く、愛国心をめぐって劇場内でも分断が生じている。実際には多くの演劇人がその実態をはかることが難しい沈黙の中にあり、粛々と自らの仕事を続けているのが現状である。

『ペテルブルグ演劇ジャーナル（Petersburg Theatre Journal）』の編集長マリーナ・ドミトレ

フスカヤ（Marina Dmitrevskaya）は侵攻直後に「演劇をやるような時ではない」と書いていたが、3カ月後の次号において「必要不可欠なもの、生にまつわるもの、重要なものを演劇は観客に伝え、客席は熱気に満ち、古い作品の中に新しい意味が見出され、新たな上演作品が現在最も必要とされている人道的な世界への追体験の場となったことを、私たちはこの3カ月の間に目の当たりにした」と演劇が持つ力を改めて強調した。

ウクライナの惨状に目を背けているかのようにロシア演劇界の大部分は日常を保っているが、今季の新作であるテアトル・ナーツィ（Theatre of Nations, Moscow）の『キャバレー』や、レンソヴェート劇場（Lensovet Theatre, St. Petersburg）の『笑いの大学』といったミュージカルやコメディ作品でさえも陰鬱なトーンが舞台全体を支配し、難しい状況に対峙する人間の姿に今日の状況が反映されている。

「黄金のマスク」演劇フェスティバルの最優秀賞は、スターリン時代における人々の運命に関する作品が並んだ。大舞台部門最優秀作品の『3人の太っちょ エピソード7〈教師〉（Three Fat Men. Episode7 Teacher）』（ボリショイ・ドラマ劇場［Bolshoi Drama Theatre, St. Petersburg］、アンドレイ・モグーチー演出）はユーリー・オレーシャ（Yury Olesha）の原作の設定だけを残し、ヴィルヘルム・ハウフ（Wilhelm Hauff）の『冷たい心臓』とコルネイ・チュコフスキー（Korney Chukovsky）の『ゴキブリ大王』を組み合わせ、スターリンによって裏切りを強要される教師の姿を描いた。ゴキブリがスターリンへと変容し、スターリンの仮面を被ったゴキブリの群れのような権力に従う者たちが市民を蹂躙（じゅうりん）する。同劇場は3年前にヴィクトル・グセフ（Victor Gusev）が1936年に書いたソ連版ミュージカル『スラーヴァ（The Fame）』（コンスタンチン・ボゴモロフ［Konstantin Bogomolov］演出）でスターリン賛美の時代をそのまま呈示して賛否両論を呼んだが、今作はその議論に対して「スターリンを肯定しない」というモグーチーの回答であった。

アンドレイ・モグーチー演出『3人の太っちょ エピソード7〈教師〉』 写真提供：ボリショイ・ドラマ劇場

小舞台部門最優秀賞の『同志キスリャコフ（Comrade Kislyakov）』（アレクサンドリンスキー劇場［Alexandrinsky

アンドレイ・モグーチー演出『３人の太っちょ エピソード７〈教師〉』　写真提供：ボリショイ・ドラマ劇場

Theatre, St.Petersburg]、アンドレイ・カリーニン[Andrei Kalinin]演出）もスターリン時代をテーマにした歴史博物館の展示のような舞台で秘密の集会が開かれ、権力に反抗する者と権力を恐れて従順になっていく者が分かれる。インテリゲンツィヤのキスリャコフは恐怖に抗えず労働者用ブーツに履き替えてコミュニストの道を進む。

「黄金のマスク」演劇賞では小舞台部門ノミネート14作品の内、７作品をペテルブルグ勢が占め、実験演劇部門でも「トーチカ・ドストゥパ」フェスティバル（Tochka Dostupa［Access Point］ Festival, St.Petersburg）の『スクール・シミュレーター（School Simulator）』が受賞するなど、同市の小劇場の隆盛がさらに際立つことになった。『テアトル』誌は2018年第35号で独立系小劇場を特集した中で「その中心地はペテルブルグ」として、26もの劇団・劇場を紹介しているが、現在はさらにその数が増え続けており、正確に実態を把握することは難しいほどだ。

その中でも現在特に注目を集めているのが上演スペース「スコロホード（Skorohod）」である。子供靴の工場を改装した建物の一角にあり、2001年に国立劇場専属の俳優だったアレクサンドル・バルグマン（Alexandr Bargman）らによって創設された小劇団「タコイ劇場（Takoi Theatre）」の主な拠点となっている。固定メンバーを置くのではなく、演目によっては国立の大劇場の俳優たちも参加するこの劇団の自由なスタイルは、まさにペテルブルグにおいて小劇団が決して小さくはない力を持っていることを象徴しているだろう。「スコロホード」では他にもPOP-UPシアター、アブノーマル・プラスティック・シアター、オープン・スペース、演劇プロジェクト27、ボリス・パブロヴィチの社会芸術劇場とAlma Mater基金のプロジェクトなど、既に演劇祭などを通じてモスクワでもその名が知られているグループに上演の機会を提供。特に今季はロシア革命前後に人気を博し、スターリンの粛清を逃れて亡命した俳

ペテルブルクの上演スペース「スコロホード」。
子供靴の工場を改装した建物　撮影：篠崎直也

優・歌手のアレクサンドル・ヴェルチンスキー（Alexander Vertinsky）を題材にした『インタビューB』（アブノーマル・プラスティック・シアター［Non-noematives Plastics Theatre］）で評価を高めた演出家ロマン・カガノヴィチ（Roman Kaganovich）の名前が目立った。

タコイ劇場では前述のヴィリパエフの戯曲を元にした『閉じた研究（Closed Research）』を現在も上演し続けており、何らかのメッセージを伝えようとする姿勢が小劇場ではより顕著である。しかし、知人の小劇場関係者によれば政府機関からの圧力が劇場に及んでいて、存続を脅かすような緊迫感を伴っての活動を余儀なくされているという。

多くのロシアの演劇人たちは「今演劇には何ができるのか?」と自問自答している。ロシアでは時事問題を直接的に扱うような作品は少ない。それは粛清や厳しい検閲を受けてきたソ連時代の体験が染み付いていることが一因だろう。しかし、何よりも彼らの中で強く共有されているのは演劇が政治の道具になってはいけないという意志である。古典作品の中に今の時代の状況にも通じる真理を見出すことがロシアの伝統となっており、特にスターリン時代を取り上げることで権力と民衆の関係を観客に問うような作品がウクライナ問題以前から見られたが、今後はこうした作品の上演も禁止される可能性がある。

劇場が争いを止めるような直接的な働きかけを行うには至らず、ロシアの演劇界が普段通りに毎日上演を続けることは無責任かもしれない。ただ、沈黙の中にも様々な声はある。それがロシア演劇の精一杯の現実だ。『ペテルブルグ演劇ジャーナル』は「恐怖は進化の糧になる」とソ連時代に戦争や権力による恐怖が芸術をより鋭いものにしてきたと指摘しているが、これは自らへの願望と決意を込めた悲痛な叫びではないだろうか。

しのざき・なおや

大阪大学大学院博士後期課程修了。言語文化学Ph.D、ロシア演劇専攻。20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド期と、ペレストロイカ以降から現在までのロシア演劇を主な研究対象としている。1999年から通算して4年間の留学生活を過ごしたサンクト・ペテルブルグでは劇場通いの日々を送り、ロシアでの観劇本数は1,000本を超えた。著書に『ペテルブルグ舞台芸術の魅力』（共著、東洋書店、2008年）がある。現在は大阪大学、同志社大学非常勤講師。